



そうになりました。そして、いつしかよいがまわってそこでねてしまいました。

つぎの朝、目をさますと、そこは庵太郎の家ではなく、妙見山のかさ松の下の芝原でした。長兵衛があわてておきあがると、そばにふろしきつつみが一つおかれてありあけてみると、お祝とかいたのし紙の下にりっぱなたんものが二たんはいつていました。

長兵衛は、これを持ってかえり、あまり

にりっぱなたんものなので、家で使うにはもつたいたないので、取りかえてもらおうとある店にいくと、「二・三日前、一人の上品なおくがたさまがみえられ、祝儀の使いものにと、この店の中でさいごくじょうのたんものを二たん持っていかれたが、たし